

## 平成 29 年度「J A 青年組織手づくり看板全国コンクール」審査講評

全国農協青年組織協議会が主催する平成 29 年度「J A 青年組織手づくり看板全国コンクール」には、全国 30 都道府県から 69 作品（看板部門 58 点、アート部門 11 点）の応募があり、平成 30 年 1 月 31 日（水）に東京・大手町の J A ビルで審査委員会を開催しました。作品募集テーマは昨年同様「農業のある地域づくりの大切さに関する地域住民へのアピール」とし、インパクト（設置場所選択を含む）、内容、デザインなどの審査基準に基づき審査を行いました。

なお、審査委員は、全国消費者団体連絡会、J A 全農、J A 共済連、農林中央金庫、日本農業新聞、家の光協会、農協観光、J A 全中の各団体からお集まりいただいた広報担当の職員など 8 名の委員で審査を行い、審査委員長は互選により、全国各地の青年部活動を記事として取り上げていただいている日本農業新聞の広報局局長代理である行田 元 氏が選ばれました。

審査の結果、最優秀賞には「みやぎ仙南農協川崎地区青年部（宮城県）」の作品が選ばれました。仙台牛をメインに描いた作品で、構図にも勢いがあり、大変インパクトのある作品となっています。また、「安心安全」「超絶美味」というキャッチコピーからは、仙台牛の魅力と、生産者としての品質に対する自信がストレートに伝わってくると評価されました。第 11 回全国和牛能力共進会宮城大会に合わせて作成され、地域の農業を盛り上げようという想いが本コンクールのテーマに合致し、最優秀賞に相応しい作品と多くの審査委員から評されました。

アート部門賞には「白山農業協同組合青壮年部 蝶屋支部（石川県）」の作品が選ばれました。案山子やキャンバスに見立てたアクリル板を組み合わせて作られたこの作品は、白山開山 1300 周年、そして今後の 100 年という長い時間の中でも変わらずに美しい田園風景を残していきたいという想いのもとで作成されました。この作品は通学路付近に設置されており、子どもたちが近寄って覗き込んだ時に、キャンバスの中にふるさとの風景が見えるという仕組みの面白さが高く評価され、アート部門賞に相応しい作品として多くの審査委員から評されました。

（各特別賞について）

### ○ 全国消費者団体連絡会賞「J A 高千穂地区青年部 五ヶ瀬支部（宮崎県）」

輝く未来に向かう子どもたちが美しい色使いで表現されています。特産品であるミニトマトが画面いっぱいの森のように表現されており、奥に引き込まれるような構成で、見る人をわくわくした気持ちにさせると評価されました。

○ J A全農賞「J A東京あおば青壮年組織協議会（東京都）」

生産者から消費者へ野菜のリレーを行うというユニークな作品で、「産地から最速」という言葉で消費地への近さが表現されています。背景にはビル街に囲まれた農地が描かれており、都市農業ならではの特徴や強みを地域住民に訴えかけている点が評価されました。

○ J A共済連賞「J Aごとう青年部 富江支部（長崎県）」

明るい色使いとかわいらしいタッチで描かれた作品で、楽しげな雰囲気伝わってきます。ハウスを背景にさまざまな年代の人物が笑顔で野菜を手にしており、このような地域を一緒に作っていきたくてと思わせる作品です。

○ 農林中央金庫賞「津軽みらい農協青年部 松崎支部（青森県）」

実りを迎えた水田地帯の「黄金の海」に佇む青年部盟友の姿を描いた作品です。これからの地域を担う若手農業者の自信にあふれた表情が頼もしさを感じさせます。奥行きのある構図、重厚なタッチなど全体としての完成度が高い作品で、多くの審査員に評価されました。

○ 日本農業新聞賞「越後ながおか農業協同組合青年部 深沢支部（新潟県）」

元気よく山盛りのお米を食べる家族が描かれた作品で、鮮やかな色使いが目を引きます。また、平昌オリンピックや東京オリンピックも近づく中、「金メダル」という言葉で世界に通用する日本のお米のおいしさを表現した点も時流をとらえていると評価されました。

○ 地上賞「熊本市農協青壮年部飽田支部（熊本県）」

作業をする農家と、見守る子どもやサラリーマンが描かれており、他業種も含めた町全体で農業を盛り立てたい、みんなで地域を盛り上げたいというメッセージが伝わります。「農業のある地域づくりの大切さ」というテーマがストレートに表現されている点が評価されました。

○ 農協観光賞「J Aさが白石地区青年部 錦江支部（佐賀県）」

笑顔の子どもたちと生産者が手をつないでいるデザインで、農業を通じた地域の絆が表現されています。中心のハートの中にはさまざまな特産物が描かれており、地域の農産物を子どもたちにたくさん食べてほしいという生産者の想いが伝わってきます。

○ J A全中賞「福岡嘉穂農業協同組合青壮年部 庄内支部（福岡県）」

農作業をする「手」を中心とした迫力ある構成で、オリジナリティのあるデザインが高く評価されました。作業着の汚れや指の表情までリアルに描かれており、日々農作業で汗を流す農業者の力強さと、自らの手で農業を守るという決意が伝わってきます。

(総評)

今回のコンクールに寄せられた作品も、その一つ一つが個性的で、地域の特色を踏まえて制作されていました。地域住民との絆や、未来を担う子供たちに注目した作品も多く、各組織が地域に密着して活動していることが読み取れました。

今年度もデザインのレベルは非常に高くなっており、絵画のようなタッチの作品やコミカルな作品等、各組織で表現方法にも工夫が凝らされていました。

また、特に屋外に設置する看板については、芸術性だけではなく、遠くから見ても目を引くことが重要になります。シンプルでわかりやすいメッセージや、はっきりとした色使いで視認性を高めた作品が評価を受けました。青年部盟友同士で議論を重ね、伝えたいテーマを絞り込んでいくことでより訴求力の高い作品となるのではないのでしょうか。

アート部門については、受賞作品以外にも非常に大規模な作品や地域性を取り入れた作品など創意工夫あふれる作品が寄せられました。次年度以降もアイデアを出し合い、様々な作品作りにチャレンジしていただければと思います。

審査では、看板部門・アート部門にかかわらず、テーマである「農業のある地域づくり」を実現するために「どうメッセージを伝えているか」という点が最大の評価ポイントとなりました。その基準として、設置場所が効果的かどうかも重視されました。作成にあたり、誰にメッセージを伝えたいのか、そのためにはどのような場所に設置することが望ましいかについても議論していただければと思います。今回は、学校や通学路への掲示を通じて子どもや保護者へのアピールを行っている組織が見受けられ、審査員からも高い評価を受けました。

その他、デザインの親しみやすさ、地域の特徴を取り入れているかどうか等が受賞の決め手となりました。

今回応募された作品をきっかけに、地域住民の食と農に対する理解が深まり、それぞれの地域で住民と一体となった取り組みにつながることを願います。また、盟友と協力して看板の制作に取り組むことで、青年部盟友の絆が強まり、各地の青年部の活動もより活発化していくことを期待しております。

今後も本コンクールの開催が各地盟友の看板制作の励みになること、そして青年部の看板・アート作品が全国各地に広がり、日本農業・地域社会の情報発信源となることと確信しております。

【審査委員】(敬称略)

行田 元<審査委員長>(日本農業新聞・広報局局長代理)、小倉 寿子(全国消費者団体連絡会・政策スタッフ)、落合成年(全国農業協同組合連合会・広報部 部長)、上野 温司(全国共済農業協同組合連合会・調査広報部 部長)、木村 吉弥(農林中央金庫・広報CSR企画室広報CSR担当部長)、魚谷 昌宏(家の光協会・編集本部地上編集部 編集長)、長友 隆(農協観光・営業企画部 副部長)、福園 昭宏(全国農業協同組合中央会・広報部 部長)